大谷さんと付き合って４０年

松澤通生
michio@nna.so-net.ne.jp
平成 27 年 11 月 16 日

大谷さんに初めて出会ったのは1974年の春である。1年半の米国のアルゴンヌ国立研究所に滞在後ヨーロッパを経由して日本に帰国直後のことであった。当時大谷さんは名古屋大学プラズマ研の客員であった鈴木洋先生の講座の助手に就任されたばかりであった。当初は名古屋と東京ということもあり、そう出会うこともなかったが、1970年代の後半に高柳先生が行われたプラズマ核融合関連の原子分子データの収集の活動がプラズマ研を根拠地として行われ、それに3ヶ月に一回位（？）の頻度でプラズマ研に通ったことがある。この活動はこの分野では高い評価を受けている。これは後に名古屋大学プラズマ研究所が核融合研に改組される際に原子分子データの収集の部門が設置される等の発展をみている。この世話役としての大谷さんは最適任であったと思う。このときはデータ収集の作業のあとで必ず行われる懇親会では大いに楽しませて頂いた記憶がある。

所で私と大谷さんとの付き合いは通常の研究者同士の付き合いとは様子が異なっている。1990年に大谷さんが電通大に移って移ってからは個人的に話す機会も多くあったが、共同研究をして連名の論文を書いたといったことはなく、会議の開催や上記のような原子衝突の分野の全体にかかわる事業でご一緒させて頂いたことが多かった。そのうち2，3の場合について触れることにしよう。

1) 日中セミナーからアジア国際原子分子物理学セミナーへ

1979年の京都のICPEACに中国本土から初めての参加があり、これを契機に宇宙研（当時）の高柳和夫先生と成都科学技術大学（当時：現四川大学）の Gou Qing-quan 先生のお二方のご努力により、1985年に成都で第一回の日中セミナーが開催された。日本から7名が参加し、そのとき大谷さんも私もその中に入っていた。その間に個人的な付き合いもはじまり、またこのセミナーの後で参加者の一人である鈴木洋先生と大谷さんが中国のプラズマ物理研究の現状の視察のため合肥の中国科学技術大学、国家同歩輻射（放射光）実験室、等離子体（プラズマ）物理研究所訪の訪問に行くとのことでご一緒させて頂いた。

実験関係には疎かったので大変勉強になった。一つ強く印象に残っていることは、上記放射光施設で個々の磁石の性能の測定をやっていて、このようなことは日本ではあまりやっていないのではとかいっていたら、大谷さん曰く、日本では十分信頼できる磁石を民間の会社で作れるのでこのようなことは不必要だと教えて貰った記憶がある。これは当時の中国のものづくりのレベルの的確な評価であったと考えられる。もちろん、現時点の中国ではこのようなことはなくなっているはずである。この日中セミナーは回を重ね、1992年に第4回日中セミナーを日本側の責任者として、都立大（当時）で開催した。この時には大谷さんや都立大の小林信夫さんには（特に会議のバンケットに関しては）大変お世話になった。当時日中に参加者がかぎられていたこのセミナーが、韓国と台湾の研究者からの要望もあり、アジア全体の会議となり、現在2年ごとに開催されているアジア国際原子分子物理学セミナー（Asian International Seminar on Atomic and Molecular Physics：略称AISAMP）へと発展し、その第1回ということになったのである。又2002年10月に日本側の組織責任者として、奈良でAISAMP5を開催の際も大谷さんに treasurer をお願いする

など多くの協力をいただいた。なお昨年2014年10月に仙台でAISAMP11が開催されている。

2) 重点領域研究「多価イオン原子物理学」

大谷さんはプラズマ物理研究所が改組再編され、土岐の核融合研究所になる前後の1990年に電通大のレーザー研に移ってこられた。この当時、日本では多価イオンに関してはNICEグループの実験が行われていたが、世界ではEBITの装置が2，3完成しており、幾つかの興味ある結果が得られつつあった。上記の重点領域研究の申請は初め平成4年（1992年）度発足ということで、都立大の金子洋三郎先生が「多価イオン科学」の研究課題の下で行ったが通らず、代表者が大谷さんに代わり、電通大から上記研究課題で申請することになった。これは原子衝突の領域の全体にわたる事業であり、市川行和さんや小林信夫さんにも来ていただき、集まって議論をしたことを思い出す。なおそれらを踏まえて大谷さんが申請書を書いた。電通大での通常の概算要求を行う際の予算規模などに比べて一けた多かった。つまり、電通大にとっても発展の一つの契機であったのである。また申請書の完成が締め切り間際となり、私が申請書を風呂敷包みにして、締め切り直前に文部省に持ち込んだことを思い出す。

幸いにしてこの申請は受理され、電通大のレーザー研にEBITが設置された。そのあとの成果等については中村信行氏が書かれているのでご覧いただきたい。

3) 第21回原子衝突物理学国際会議：ICPEAC 21（1999）の開催

1990年代の初め、1979年に高柳先生が第11回原子物理学国際会議（京都ICPEAC11）を組織されてから約10年が経過し、日本でまたICPEACを開催してはという話がでてきた。そもそも、原子衝突協会（現原子衝突学会の前身）は日本でICPEACを開催するために組織されたといってよい。歴代の協会の委員長は高柳和夫、金子洋三郎、渡部力、鈴木洋の諸先生方で、私の属する世代より一世代上の方々である。このころが世代の変わり目で、諸般の状況から私が鈴木先生のあとをついで協会の委員長になっていた。

1993年のオーフスのICPEAC18において、1999年に日本で開催の提案をおこない、承認された。従って日本側の代表者は当時の協会の委員長が引き受けることになり、まず準備委員会が発足した。大谷さんはこの委員会のメンバーとして treasurer の役割をやっていただくことになった。開催場所の仙台への決定から始まり多くの事柄があったが、特に我々が苦労したのは開催のための資金の準備であった。1990年代の初めの日本経済のバブルの崩壊があり、状況は大変厳しかった。募金委員会の委員長には有馬朗人先生にお願いをし、承諾を頂いていたが、文部大臣に就任されたので、急遽、大谷さんが募金委員長代行を自らかってやってくださった。また学術会議への会議開催の資金の申請がうまくゆかず、2人で頭を抱えていたこともあった。1999年の4月に大谷さんの努力で会議の文部省への1000万円の補助金の申請が正式に認められ、ここで始めて資金的には安心してよい状況になった。

1999年7月に開催された仙台ICPEAC21は参加36ヶ国および1地域、参加者数565名で成功といってよいと思われる。これは、会議の当時、私の後に協会の委員長を引き受けて下さった東工大の籏野嘉彦氏がひきいる原子衝突研究協会の協力や仙台の研究者の皆様方のご尽力など多くの方々の協力を頂いたのであるが、大谷さんのどちらかといえば裏方としての尽力の寄与が大きかったのである。大いに感謝している所以である。

以上は大谷さんとの付き合いで私が経験した事柄の一部である。付き合ったといっても助けて頂いたことが多い。またここに書いたことは表面的なことが多いが、これらの過程で、否応なく相談し、個人的にもよく話す機会は非常に多かったが、普通の研究者間の付き合い方とは次元が異なっていた。それらを通して感じたのは、大谷さんのように度量が大きく、若い人の世話をよくし、また何かやろうとするときは人を誠実に説得し、組織化するのに上手な人は他にいないということ

であった。結果的には出会ってから40年間、濃淡はあったけれども良い付き合いをさせて頂いたというのが今の感想である。

所で、大谷さんは私とは同じ世代の属すると思ってはいたが私より5歳も若かったので、先に往ってしまわれたことを誠に残念に思っている。謹んでご冥福をお祈りする次第である。